

国語科「読むこと」の授業づくりに関する研究

～ “教材研究” から “授業づくり研究” へ ～

片 山 守 道

I はじめに

- 1 研究の問題意識
- 2 国語科「読むこと」の授業づくり

II 国語科「読むこと」の教材研究

- 1 これまでの教材研究
- 2 「学びのビジョン」を描く

III 授業づくり研究の構想

- 1 授業づくり研究の意義
- 2 授業づくり研究の考え方

IV 授業づくり研究の実践

- 1 「どう思う？レシピの表し方」の授業づくり研究
- 2 「どう思う？レシピの表し方」の授業実践

V 研究の成果と課題

- 1 授業づくりに大切なこと
- 2 今後に向けて

I はじめに

1 研究の問題意識

三十余年、小学校教員として実践研究に取り組む中で、かなりの教材研究や授業準備をしたにもかかわらず、思うような授業にならないという経験を数多くしてきた。子どもの思いや考えは十人十色で、学級に35人の子どもがいるならば、35通りの気付きや反応があって然るべきなので、子ども主体の授業を考えるならば、思い通りに展開しないことのほうがむしろ自然なことなのかもしれない。だが一方で、教師の意図と子どもの思いが合致し、時には教師の事前の想定を超えるような“手応え”のある授業となる時もある。手応えのある授業になる時と、そうはならない時…その違いは、どこにあるのだろうか。それは偶然ではなくて必然、授業づくりの見方・考え方など、教材研究や授業準備の仕方によるところも大きいのではないかと考える。

「授業名人」という言葉があるが、昭和の時代—教師主導型の授業が主流だった時代は、職人のような教師の技（授業技術）は、伝授されるというよりも、見て学び真似て盗むという側面が強かった。向山洋一による「教育技術の法則化運動」以降、平成の時代は授業技術・指導方法への注目が高まり、教育書もいわゆるハウツー本が主流となった。

授業づくりにおいて、確かに授業技術は必要だが、根幹ではない。授業技術があれば、子どもを引きつけ、その場を魅力的な学習空間とすることはできるかもしれないが、大きな学びのビジョンがないと、深い学びを得ることにはつながらない。そして、しっかりした学びのビジョンをもつためには、やはり広く深い教材研究が必要となる。

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』という中央教育審議会答申にもあるように、「Society5.0の時代」が到来し、先行き不透明な「予測困難な時代」と言われる急激に変化する令和の時代。学びの在り方や授業づくりの考え方についても見直しが求められている。

以上のような経験知・実践知から、これまでの教材研究について見つめ直し、これからの授業づくりに必要な見方・考え方を探っていきたいと考えている。

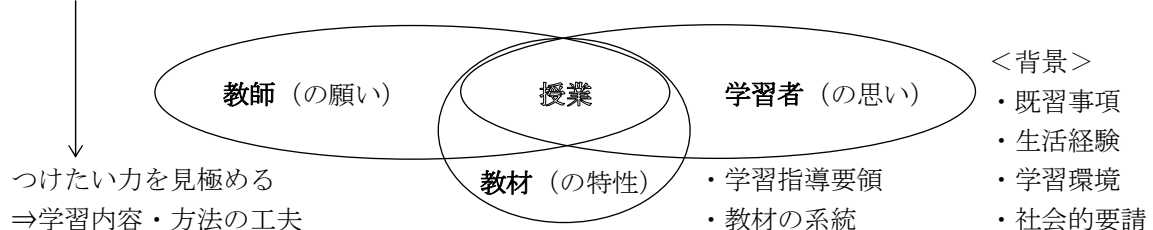
2 国語科「読むこと」の授業づくり

国語科「読むこと」の授業づくりにおける教材研究の重要性は、経験豊富な国語教員が誰しも指摘することである。

「教材研究」という言葉は、狭義には学習の材としての教材の研究という意味合いで使われることもある一方で、もっと広義に、指導法研究なども含んだ授業構想全般を指して用いられることもある。国語科「読むこと」では、教科書教材の研究という趣旨で語られることも多いが、授業づくりにおいては、狭義の教材研究だけでなく、授業イメージまで見据えたより広義の教材研究が必要となる。

授業づくりでは、一般的に「教材」「教師」「学習者」が大切な三要素とされる。教材研究には、素材（作品）研究、指導法研究、学習者研究があるとする考え方があるが、これらが分離することなく融合するところに授業づくりがあり、学びが生まれるのであろう。「読むこと」の作品の教材性をとらえつつ、学習者に応じた指導の工夫により、学習者の〈読み〉が深まるような授業を構想したい。

図1 授業づくりの三要素



Ⅱ 国語科「読むこと」の教材研究

1 これまでの教材研究

まず、飛田多喜雄・野地潤家監修の『国語教育基本論文集成第24巻 教材研究方法論』（1993）から教材研究に関する論考をいくつか引用する。

「4 国語科教材研究の方法—文学教材を中心に—」（井上敏夫 pp. 53-68）〔初出：「教育科学国語教育」1980年4月〕では、「(一)教材の作品論的研究」と「(二)教材の学習指導論的研究」の二つの分野があるとして、広義には、第三として「学習指導方法の研究」をも含めて教材研究と見る考え方もあるが、これを別枠として見る見方のほうが適切であろうと述べている。井上のとらえ方は、いわば教材文研究こそ教材研究であるという、かなり限定的なとらえ方である。

「6 教材研究法の確立」（飛田多喜雄 pp. 78-98）〔初出：『講座・国語教育の改造Ⅱ』1968年、明治図書〕で飛田は、「教材研究とは、そうした価値体である教材を、学習指導が効果的になされるように、実践的な教育的交渉の場には焦点をおきながら、事前にあらゆる角度から総合的・分析的に研究して陶冶価値の所在をみきわめ、教材そのものの性格を決定することである。広い意味での学習者を想定して研究を進めることが教材研究の特色である。そこに単なる作品研究や文章研究などの違いがある。」〔p. 79〕と述べている。学習者の想定を特色としているが、ここでも事前の教材文に関する深い研究こそ教材研究であるという考え方が見える。

「2 国語科の教材研究」（倉沢栄吉 pp. 32-40）〔初出：東京教育大学附属小学校内初等教育研究会『教育研究』第14巻9号1959年9月1日〕には、「新しい意味での教材研究は、(1)国語科の全体計画のうえに立つ研究であるべきこと。(2)言語素材としての研究や素材に対する指導者の教育観の記述に止まらず、学習の可能性と必要な手順とを占めるものであること。である。」〔p. 33〕とある。倉沢は、「学習の可能性と必要な手順」という具体的な指導に関する研究をも含めて述べているという点でより広義なとらえ方をしていることが分かる。さらに倉沢は、同論考の中で、「また、教材を、既成の与えられたものと考えず、常に生まれ出るものと考えて「教科書の文章をもとにして、児童の示す反応を期待し、その反応の中に新教材が生まれること」を考えるべきである。」と述べている。学習者の反応が新教材となり得るという見方を示していることは、特筆すべき点である。

「17 国語教材研究の方法」（高森邦明 pp. 202-217）〔初出：『新国語科教育講座5』1975年5月、明治図書〕において、高森は「(作品を教材化することから授業に移るまでの)その準備全体が教材研究であるといってもよい」と述べ、その内容を以下の8項目に整理している。①本質的研究 ②学習者研究 ③指導条件の研究 ④指導内容の研究 ⑤発問準備の研究 ⑥追求過程の研究 ⑦指導組織の研究 ⑧指導計画の研究 高森はこの8項目は「教材研究を最広意に解することに」なり、「④の指導内容の研究をもって狭意の教材研究とみることができる」と述べており、教材研究の一つの全体像の考え方を示している。

次に、国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』（1988）における「教材研究」の項（pp. 191-199 須田実）には、「教材研究とは、教材のもつ教育的機能の価値を研究することである。研究に当たっては、学習指導要領に示された国語科教育の目標・当該学年目標・教材に相当する領域・事項のどれにあたり、特にどのような指導内容（事項）に焦点づけて言語能力を伸長させようとするかを検討し、学習効果を高める方法について研究することが眼目となる。〈後略〉」〔p. 191〕とある。教材を学習指導要領と結びつけて目標を明確にし、指導内容や指導方法を研究するという、指導計画や展開方法についての研究を視野に入れていることが分かる。

田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典 第四版』（2009）の「教材研究」の項（pp. 174-175 関口安義）には、「教材研究とは、教師が毎時間の授業に際して、あらかじめ扱う素材を研究し、学習者の発達段階・興味・関心に応じてその指導の過程をいかにするかを考える作業をいう。一般的には、授業前の研究や準備を指すが、広義には、授業中の思いつきや授業後の反省を含めて考えるものである。」とある。さらに「事前の研究準備ばかりではなく、授業中にもそれはできるし、更に授業後の反省の中に、

その大事な部分が存在する。授業の質の向上は、事前・事後を問わず、絶えず学び、反省し、前進しようとする教師の努力があってこそ実現するのである。」と、授業前だけでなく、授業中、授業後の研究についても言及している。「素材（作品）研究」「指導法研究」「学習者研究」などについても解説し、幅広く教材研究をとらえている。

また、澤本和子監修『新提案 教材再研究 循環し発展する教材研究』（2011）で益地憲一 [pp. 12-15] は、教材研究について「素材的研究（教材）」「指導的研究（教師）」「反省的研究（学習者）」を事前・事中・事後と繰り返すことで編成的研究へと発展していくと整理している。

以上のように、教材研究は狭義には教材となる素材（作品）の教材性に関する研究ととらえられ、広義には、事前の計画はもとより授業中・授業後も続く教材と指導に関する研究ととらえられてきた。

2 「学びのビジョン」を描く

「読むこと」の授業づくりにおいては、学習材となる文章に関する狭義の教材研究を丁寧に行うことは大切である。それと同時に、広義の教材研究に含まれる授業方法や学習者に関する研究も求められる。では、広義の教材研究を行えば授業準備は万全かという点、その前提となる「学びのビジョン」が十分に描けていないと、充実した授業づくりには至らないであろう。

「学びのビジョン」は、授業デザインと呼ばれる概念と近いものだが、授業デザインという言葉が一単元や一単位時間の具体的な授業構想として用いられるのに対して、「学びのビジョン」は、より大きなカリキュラム構想、つまり教育観・指導観に関わる概念と考えている。そして、「学びのビジョン」を描くためには、どのような学び（学力）をどのように育むかという意識が必要となる。

2017年の学習指導要領の改訂で「主体的・対話的で深い学び」が示され、「学びの地図」としての枠組みづくりと、各学校における創意工夫の活性化が求められ、以下の①～⑥の観点が示された。

- ① 「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
- ② 「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
- ③ 「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）
- ④ 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）
- ⑤ 「何が身に付いたか」（学習評価の充実）
- ⑥ 「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）

以上の観点は「学びのビジョン」を描く上で大切である。また、「主体的・対話的で深い学び」とは何かという以下の説明も「学びのビジョン」を描く際に踏まえたい考え方となるであろう。

・「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法のことで、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。

・「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、以下の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることである。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

Ⅲ 授業づくり研究の構想

1 授業づくり研究の意義

(1) 授業づくり研究とは

国語科「読むこと」の授業づくりにおいて、広義の教材研究とその前提となる「学びのビジョン」は大切である。授業構想のために必要となるこうした教師の授業に対する見方・考え方も含む授業準備全般を指して、教材研究と呼ぶとらえ方も散見される。しかし、教材研究という言葉には、前述したような狭義の意味でのとらえ方など、言葉の解釈に幅があり、ひとことで教材研究と言われてしまうとその範疇が不明瞭になってしまうという問題点がある。

そこで、広義の教材研究に近い範疇の研究活動、即ち、「学びのビジョン」のもとで狭義の教材研究や授業方法研究、学習者研究などを結び、授業構想を構築していく一連の実践的研究活動を「授業づくり研究」と呼ぶことを提唱したい。

「授業づくり研究」とは、教師の描く「学びのビジョン」のもと、教材の特性と学習者の思いをふまえて授業の内容や方法などを検討し、具体的な授業構想を構築して、実施・検証に至るまでの教師の研究的な取り組みである。

(2) 教材研究（広義）と授業づくり研究

授業づくり研究は、ある一つの研究方法を主張する方法論ではない。また、授業づくり研究で取り組むべき研究内容は、これまで広義の教材研究で行ってきたことと変わるものでもない。しかし、教材研究を授業づくり研究と呼び変えていくことで、研究の中心が、範疇が曖昧になりがちな「教材」から「授業づくり」へと移ることになる。これは、教材を通して何をどう学ばせるかという教授型から、学習者の学びをどうつくるかという学習者主体型への、授業観の転換を促すものでもあると考えている。

教材研究（狭義）と指導法研究、学習者研究などのさまざまな教師の準備が有機的に連関し、一体化する学びの場をつくっていかないと“手応え”のある授業は生まれ得ない。こうした授業の要件に着目し追究するのが授業づくり研究であるということも言えよう。

2 授業づくり研究の考え方

(1) 真に「学習者主体」の授業を構想する

学びのあり方として「主体的・対話的で深い学び」が謳われ、学習者である子ども主体の対話を取り入れた授業構想がなされるようになってきている。だが、一見、子どもが生き生きと楽しそうに学び、主体的に取り組んでいるような学習も、それらが全て教師のお膳立ての上で、与えられた活動に一生懸命に取り組んでいるといった様相であった場合、それは本当に主体的な学びであると言えるのだろうか。もちろん、教師の仕掛けのもとで主体的に取り組む学びは、学びの楽しさや方策を知る経験として必要である。しかし、真に「主体的な学び手」を育てたいと考えるならば、そこで満足することなく、自学自習、自ら課題を見出し学びを構想し実践しようとする姿勢を育むことを志向すべきである。そのためには、今の活動が何につながるのかという「見通し」や、その活動の意味となる「やりがい」が意識できるような授業を構想していく必要がある。

では、学習者にとって、「やりがい」はどこから生まれるのであろうか。やりがいのある学習としていくためには、学びの場が創造的な空間であることが重要である。学習者が「自分が」「自分で」「自分だから」と、自己実現の場として、自分の責任で自由に工夫できる余地があり、自ら取り組める学習というのは、やりがいのあるものとなる。また、相手意識や目的意識などを明確にし、学習者にとって「必要感のある学び」としていくことも大切なことであろう。そして、学習を通して、手応えをつかめる「実感のある学び」となるよう工夫していく必要がある。「この学びが何かに生きる」という意識をもたせたい。

そのような学習者である子どもが主体となる授業を構想するために、教師目線ではなく、もっと子ども目線に立ち、子どもが取り組みたいと思えるのか、楽しいと感じるのか、学んだ実感をもてるのか、といった見方・考え方で授業構想を見直していくことが必要であろう。

子ども目線に立つためにも、授業のみならず学級経営をはじめ日常の学校生活全般を通して、子ども一人ひとりとの関係性を築き、個々の学び手の思いをできるだけ丁寧にとらえていくことも大切にしたい。これまでの教材研究でも、学習者研究の必要性は言われてきたが、教師側からの学習者の学びの履歴や学習状況の実態把握に重きが置かれており、具体的な学びに対する子どもの思いにまでは目を向けられていないことも多い。一人一人の具体的な実態を把握し、個々の興味・関心がいかに学びと結びつきそうかを考えるとといった学習者の側からの学習者研究が求められるところである。

また、狭義の教材研究についても、子どもの目線は重要になる。田近洵一（2014）は「文学の教材研究は、教材とする作品を、教師がまず一人の読者として読むことから始まる。一人の読者としての〈読み〉の体験があって、初めて教師は、作品を教材とし、その〈読み〉の成立を学習内容とすることができる。」と述べている。（『文学の教材研究』p.9）これは、まず授業者であることを抜きにして一読者としての〈読み〉をもち、次に教師の立場から「学ばせたいこと」「気付かせたいこと」「考えさせたいこと」などを考えながらさらに読み、教材性を追究する、ということであろう。その上で、さらに、学習者である子どもの立場に立ち、学習者の子どもたちは「ここを面白いだろう」「ここに疑問を持つだろう」「この言葉の意味が分からないだろう」などと、具体的な反応を予想しながら読むことを大切にしたい。この子どもの立場からの〈読み〉を十分に想定しておくことで、教師の〈読み〉へと導くような授業から脱却することができるであろう。

そして、授業は教師がつくるのではなく、子どもたちとともにつくっていくという意識で、授業が始まった後も、子どもたちの反応を見ながら常に授業構想を問い直し、必要に応じて軌道修正して柔軟な展開を心掛けることが肝要となる。

(2) 授業づくり研究における「学びのビジョン」

授業づくり研究を進めるにあたって、まず、カリキュラム・デザインともなる「学びのビジョン」を描き、育てたい子ども像やどのような学びの場をどのようなアプローチで創っていくかという全体像のイメージをつくる必要がある。「学びのビジョン」を描くことは授業づくり研究の基盤となるものであり、そういう意味で前提ではあるのだが、最初に描けばそれで終わりという性質のものでもない。実際の授業や学習者の学びの様相をみながら、常に見直しブラッシュアップしていくべきものである。

学習者主体の授業づくりを志向する時、スタートもゴールも異なる多様な学習者がいる前提で、どれだけ具体的な授業場面をイメージし、一人一人にとって「個別最適な学び」となるよう、多種多様な想定に柔軟に対応する準備ができていくかという視点は重要である。また、教師も学習者である子どもも楽しんで取り組める工夫の余地のある学習活動を開発していこうとすること、学習者の思いや思考に沿った可変的な単元構成を工夫することなども、「学びのビジョン」を描く時点で考えておきたいことである。

(3) 授業づくり研究の視点

授業づくり研究においては、「学習者のつぶやきや反応、察せられる思いなどをキャッチする教師のアンテナ」や「時間や空間などを考えた状況に応じた心地よい学びの場づくり」など、これまで授業勘・授業のセンスなどと言われてきた非認知能力にあたる側面も重要となる。ただし、こうした点については、まだ十分に検討できていないので、今後の課題としたい。

現時点では、以下の視点をもって、授業づくり研究にあたることが重要と考える。

- ① 「学びのビジョン」を描き、育てたい資質・能力を明確にすること。
- ② 教材の特性を丁寧にとらえ、授業構想に結び付けること。
- ③ 学習者の興味・関心や学びへの思いをとらえ、授業構想との関連を図ること。

- ④ 全体構想（単元構想）をイメージし、各時間の位置付けを考えること。
- ⑤ 学習の必要感を生む仕掛けや導入を工夫し、達成感のある学びへ導くこと。
- ⑥ 個の学びと集団による学び合いの場を有機的に組み合わせること。
- ⑦ 実の場の設定など、見通しの意識化を図ること。
- ⑧ 思考ツールとして、〈読み〉や内言を可視化（見える化）すること。
- ⑨ 学習用語などを効果的に用いることで、学習の概念と確立すること。
- ⑩ 自己評価などにより、自己の学びの自覚（学び方の学び・メタ認知）を促すこと。
- ⑪ 具体的にイメージすることで授業構想を常に見直し、必要に応じて改変していくこと。

上記①～⑪の授業づくり研究の視点は、授業づくりを構想していく上で必要と思われる事項を整理したものであるが、チェックリストのように用いていく性質のものではない。網羅的にまとめているわけではなく、授業づくりに有効であろう視点を挙げているので、省いてもよい視点もあれば、上記の視点以外にも取り組むべきことはあることにも留意されたい。

IV 授業づくり研究の実践

1 「どう思う？レシピの表し方」の授業づくり研究

(1) 授業の構想（学びのビジョン）

○単元名：どう思う？レシピの表し方

○教材名：『カレンの台所』（滝沢カレン・文）より「鶏の唐揚げ」

○授業の構想：

これまでの国語の学習で、子どもたちは様々な説明的文章を読み、説明の順序、序論・本論・結論、原因と結果、理由と事例、事実と意見など、論理的で分かりやすい文章表現の“型”を学んできている。こうした説明的文章を論理的に読む学習を通して、論理的思考を育むことも大切だが、説明的な文章でも、そうした“型”にとらわれることなく、豊かな言語感覚による様々な表現の可能性に触れ、文章を読んで「面白い」「イメージが広がる」「楽しそう」など感性的を働かせて読む、感性的思考も磨いていきたい。このように考え、感性的思考を働かせて読む文章として『カレンの台所』を教材化し、未習の表現形態に触れることで、個々の感性的思考を磨き、言語感覚や表現の幅を広げていく授業を構想することにした。

(2) 教材の特徴（教材研究）

滝沢カレン『カレンの台所』は、著者の独特の言語感覚による自由な文体と表現で、極めて感性的に書かれたレシピ本である。通常、料理のレシピを説明するときには、必要な材料を示したり、具体的な手順を箇条書きなど整理して書いたり、材料の分量や調理時間などを数値を用いて論理的に説明したりしていくものである。しかしながら、本書は、そうした説明的文章要素は全くと言ってよいほどなく、多彩な比喩などを交えながら、調理の手順・過程を文芸作品のように物語っていく読み物となっている。

以下、教材として取り上げることにした「鶏の唐揚げ」から表現の特徴の具体例を紹介する。

○独特の比喩表現：子どもの頃に集めたガチャガチャサイズくらいの形に切ります。

鶏肉ひとつにアクセサリーをつけるくらいの気持ちで

あとはごま油をご褒美をあげるくらいにします。

自分が二の腕気にして触ってるくらいの力で

面白いくらいにブったりした鶏肉があるはずです。

潤い満タンの鶏肉を一気にパサパサ雪世界にしてあげます。

○擬人化：そこに冷たい何も知らない鶏肉を入れてあげます。

やれやれとポツリくつろぐ鶏肉に

すぐさま何かしらの反応を見せたら、あ、楽しくやってるな、と見過ごしてあげてください。

だんだんとキャピキャピ音が高くなってきたら、ほんとうに出してくれの合図です。

- 語りかけ口調：私は味が濃いのが好きなので、今から話すことは味濃いいと思いながら聞いてください。
 薄いのが好きの方はこれから話すよりは自分で決めてくださいね。
 男のみなさんは自分の力を見せない程度にしてあげてください。
 あ、その前にみなさん激熱油は用意できていますか？
 しっかり個々ではコミュニケーションとってください。
 そんな鶏の唐揚げの物語でした。

上記の他にも、省略や倒置法、色彩表現やオノマトペ、独特の感性による注意書きなど、一部、筆者に寄り添ってイメージを膨らませないと解釈が難しい部分もあるものの、全体的に感覚的に作る料理の楽しさが伝わる魅力的な文章となっている。

著者は、同書「はじめに」で「数字に惑わされずに ただ自由に絵を描くように 料理をしたらいい」「目と親友になってさ 目が計りになってさ 最後は味見に任せちゃいい」と述べている。料理の初心者レシピに頼るが、毎日のように料理を作っている人は、レシピにとらわれることなく、もっと感覚的に、創造的に、目分量で作っていく。著者は、その感覚を伝えたかったのだろう。本文には、著者が感じている料理の楽しさ、料理への愛が溢れている。「はじめに」には、次のような文もある。「自分だけの味 自分だけの作品があっていい」「台所はあなたと食材たちの舞台 始まりも終わりも自分たちで彩れる」「“何を作ろうかな” が、毎日のちょっとした ワクワクした時間になりますように」

このような著者の考え方や感性の詰まった未知の文章に触れることで、学習者が自らの表現の幅を広げることのできる教材であるととらえている。

2 「どう思う？レシピの表し方」の授業実践

(1) 単元の計画

- 単元名：どう思う？レシピの表し方
 ○教材名：『カレンの台所』（滝沢カレン・文）より「鶏の唐揚げ」
 ○対象：小学校第6学年児童（2学期11月実施）
 ○目標：◎語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、使われている語や語句を読もうとすること。
 ◎文章を読んで得た気付きや感想を共有し、自分の見方や考え方を広げようとする事。
 ◎独特の表現の工夫のよさを味わい、自らの表現の幅を広げようとする事。
 ○単元の計画：
 本単元は、1時間の飛び込み授業であり、以下、本時の計画でもある。

| 予想される主な学習活動 | 指導上の留意点 |
|-------------------------------------|---|
| 1 「鶏の唐揚げ」を読み、気になったことや気付いたことなどを書き込む。 | ○料理の経験を問い、レシピのイメージを想起させた後、『カレンの台所』を紹介し、教材文「鶏の唐揚げ」のプリントを配る。 |
| 2 グループで疑問や感想などを共有し、話し合う。 | ○まずは全文を黙読し、その後、気になった表現に下線を引くなど書き込むよう促す。 ○グループはファミリー（4人組の生活班）とする。 |
| 3 疑問や気付きを全体で共有し、文章の特徴について話し合う。 | ○拡大した教材文を掲示し、疑問やわかりにくい点と表現の工夫を色分けして傍線を引いたり、意見や気付きを書き込んだりする。 |
| 4 本時の学習を振り返り学習感想を書く。 | ○参考資料として『カレンの台所』『はじめに』の文章を配付し、筆者の意図に気付かせたい。 |

(2) 授業実践の実際

① 教材と出合う

最初に家庭科の学習以外で、家庭で料理を作ることがあるかを尋ねたところ、9割方の子どもが「ある」と答えた。そこで、料理を作るとき、作り方をどうやって調べるか問うと、かなりの子がインターネットでレシピを検索することが多いとのことだった。レシピについてのイメージを確認した後、レシピ本『カレンの台所』を見せた。ほとんどの子が、著者である滝沢カレンのことは知っているけれど、この本は見たことがないということだった。そこでプリントした「鶏の唐揚げ」を読むことにした。

② 文章の気になるところ、面白いところを見つけ、ファミリーで話し合う

初めて読む独特の文章表現に、多くの子から「どういうこと?」「分かりにくい」「はっきりしない」と、戸惑う様子があったが、一部の子からは「面白い」という反応も見られた。

ファミリーでは、疑問を中心に考えを出し合い話し合う姿が見られた。

③ 全体で共有し、話し合う

ファミリーでの話し合い時から、どのファミリーでも話題となっており、全体の話し合いで真っ先に疑問として上がったのが、「今回はただただ食べたい、知らない人を知らない唐揚げを久しぶりに作ってみました。」(下線は引用者)という一文にある下線部分の意味(解釈)である。学級の大多数が「どういうこと?意味わかんない」とお手上げだったが、2, 3名ひらめく子がいて、「省略されてるんじゃない」と、「(唐揚げを)知らない人を(私は)知らない(みんなが知っている)唐揚げ」と説明すると、「ああー!」と合点がいき、一気に納得が広がった。

その後、「比喩表現が独特」「鶏肉が擬人化されている」「大雑把な表現だが、なんとなくイメージできる」「視覚や嗅覚など五感を使った表現がある」「比喩表現が独特」「鶏の唐揚げの物語になっている」など、様々な気付きが共有された。

④ 学習感想を書く

最後に学習感想を書いた。その際、筆者の思い(表現の意図)について知るための参考資料として『カレンの台所』の「はじめに」の文章を配って読むように促した。

- よくあるレシピは「○○が50g」や「△△が200ml」や「15分間温める」と書いてあるが、このレシピは「こんな量で味するか?との程度」や「ほんとは出してくれの合図」など、目分量で、比喩や擬人化、倒置法をまじえながら説明しているところが面白いと思った、正確性よりも、楽しさを追求して料理をしていると思った。
- 「カレンの台所」のレシピは、具体的な量が書かれていないが、普段の感覚をもとにして書かれているため、作る人にとってはオリジナルの唐揚げをつくることができると思う。「ガチャガチャサイズくらいの形」や「キャピキャピ音」などの比喩表現もあって分かりやすい。
- 少し文が分からない所があったりしたけれど、見る人にとっては面白い文章だったりして色々な観点から見ると変わる文章でした。オノマトペや比喩を使ったり、現実に例えていたりして面白いなと思いました、」最初一回見た時、解説不明の文章があったりしたけど、よく読んでみると分かっていたりして面白いのかなと思いました。
- すごい独特で、面白くて、楽しみながら料理をできそうなレシピだな～と思いました。読みとくのが面白いし、順序を逆にしていたり、ややこしいけど、効率よりも作っている間の楽しさを重視しているようで、心のゆとりみたいなのが育つのかな～と思いました。自由、とか、など、とか、自分で決めてください、とか、この人は料理を楽しくやりたいんだなど伝わってきました。
- 鶏肉に人と接しているように、調味料をかけたり、冷蔵庫に入れたりして面白いなと思いました。そんな風につくったら楽しいな～と思いました、適当に自分の思うままに作るからこそ、自分のつくりたい作品をつくれると思った。
- とても表現が面白くていいと思いました。ほかのことをやる時の感覚や気持ちに例えていて分かりやすい所もありました。でも、ちょっとよく分からないところもありました。でも、そこを読み解くのも面白いです。
- 初めて読んでみて「本にはこのような書き方があるのか」と思った。ところどころで人間の気持ち、唐揚げの気持ちを書いていることが普通とはかわっていてもおもしろかった。表現の仕方も「アクセサリーをつけるくらいの気持ち」というようなものがおもしろかった。次の絵便りで、このような書き方をしてみたい。ただ、使すぎると分かりづらくなる。

- 物語りになっていて面白かった。そして鶏肉のことを人のように見ているのも不思議な感じでしたが面白かった。そして字体が違うのが面白かった。
- わざとわかりにくい文末にしたりすることで読者に考えてもらい本を読むのを楽しませているようだった。「はじめに」に書いてあったように料理には正解がないので、同じように文章にも正解がないのかもしれないです。
- ふつうのレシピ本とちがっていい所は、p. 10の所で、二つの選択肢があって、わかりやすいことです。悪い所は、少し理解に時間がかかる表現がある所と（数値が）具体的でない所です。
- 少し分かりにくい表現もあったけどおもしろかったです。ふだんはしっかり量とかを計って料理しているけど、感覚で作るのも良いと思った。
- 滝沢さんの個性的な文章を題材にしておもしろかったです。先生が文章に書き込んでいく形式がとても分かりやすかったです。
- お料理の話だったので楽しくできました。この本の人は独特な表し方をするので、いろいろな発見ができたのでよかったです。
- すごく面白かったです。表現方法が独特なのは知っていましたが、本になるとより面白いなと思いました。あんな比喻表現はあまり思いつかないので本当にすごいなと思いました。
- からあげのレシピの書き方がおもしろかった。この本を読んでみたくなりました。授業が分かりやすくてよかったです。
- こういう独特な料理本も違っていても面白いなと思いました。意外にこういうのいいかもと思いました。
- 正直、ちょっと何言っているか分からなかったけど、料理への愛は伝わってきた。
- 「はじめに」を読んで料理を作ることが面白いと感じてほしいという事が分かりました。変わった単語を使っている面白かったです。
- 最初レシピを見た時は、もしかしてわざと面白おかしく書いているのかな？と思いました。が、「はじめに」を読んで、料理に行き詰まっている方々が楽しいと思えるようにしていると知り、かれんさんの料理好きを実感しました。
- 今まではきっちりとした生活を目標にしてがんばってきたが、ちょっと自分にも甘えながら生活を楽しみたい。

(3) 実践を振り返って

初読では、読み慣れない文体や表現に戸惑い、「どういうこと？」と戸惑う反応も多かったが、話し合いを通して難解な部分を読み解き、解釈の可能性や表現の面白さに具体的に触れたことで、筆者の工夫や豊かな言語感覚を味わうことができた。わずか1時間の授業ということで、教材文を面白いと好意的に感じる子、分かりづらいと否定的な子、文章の受け止めは様々だが、多彩な比喻や擬人化など、具体的な工夫は理解し、興味を持った子も多かった。「もっと読みたい」「自分の表現に生かしたい」といった反応も見られたので、個々の言語感覚に刺激を与えることはできたのではないかと考えている。

授業づくり研究における構想が、実践での子どもの学びに結びついたように感じている。

V 研究の成果と課題

1 授業づくりに大切なこと

「授業づくり」という言葉は、21世紀に入って目にすることが多くなってきている。以前は、教材研究、指導法、授業方法などと呼ばれていたが、教師による方法論という色彩が強いので、学習者主体という考え方が主流となってきたことと無関係ではないであろう。

国語科「読むこと」の授業づくりにおいては、国語の学びの特性をとらえ、「学びのビジョン」を描いて、教材となる作品の特性をふまえつつ、学習者の目線に立って学習者主体の学びを構想していくことが肝要である。

〈読み〉の力を高める授業をするには、学習者である子どもを鍛えなければ、という発想に陥ることもあるが、主体的な学び手は、いきいきと学ぶ子であり、そういう子に育つためには、学びの楽しさを実感させることが近道である。そう考えた時、実生活で生きて働く言語活動を充実させ、「楽しむこと」と「頑張ること」のバランスを考えた教師の手綱さばきが求められてくる。手綱さばきには、“遊び”＝

ゆとり、楽しみも大切である。何よりもまず、教師自身が「面白い」と感じる創造的な授業づくりをしていくことが、学習者にとっても面白い、楽しい学びとなるのではないだろうか。

2 今後に向けて

本稿では、“授業づくり研究”という言葉でこれまでの広義の教材研究を見直し、国語科「読むこと」の授業づくりのあり方を探ることを試みた。研究は途についたばかりで授業づくりの内容面はまだ未整理ではあるが、たくさんのご批正をいただくことで、次の道筋へとつなげてゆきたい。

Ⅱ章でも引用した『国語教育基本論文集成第24巻 教材研究方法論』の「3 教材研究の基本的条件」（倉沢栄吉 pp. 40-52）〔初出：「授業研究」5号1964年4月1日，明治図書〕で、倉沢は「教材化のための基本条件は、その教材を受け取る児童・生徒の構えにある」として、「・彼らは、そのもの（資料）を、どの程度意欲的に受け取るか。・彼らは、そのものから、どんな問題を、どのように切実に発見するか。・彼らは、そのもので、どんな活動への刺激をどの程度感じるか。」〔p. 49〕と述べている。また、教材研究のタイミングとして、「じつは、指導過程の中で息づいているときにする検討吟味が有効なことが多い。これは、「子どもとともに学ぶ」態度である」〔p. 50〕とし、さらに、「児童・生徒の実態によって教材のどこを重点化したらよいかと考える」〔p. 51〕「教材研究は、児童・生徒の反応を予測して行われる。」〔p. 52〕と、学習者を強く意識した教材研究のあり方を述べている。

本稿の問題意識の根底には、現在の教材研究（広義）が教師による指導者目線に寄っていないか、もっと学習者目線で見直す必要があるのではないかということがある。この問いに対し、倉沢は今から50年以上前に、既に、学習者から見た教材研究の必要性を謳っていたのである。

倉沢の論考の最後には、次のように書かれている。「教材研究は、教材のためにされるのではなく、児童・生徒のためにされるというのが、平凡な結論である。」

平凡な結論を肝に銘じつつ、これからの時代にふさわしい「授業づくり」について、さらに分析的に追究していきたい。

【参考文献・引用文献】

- 阿部昇（2019）『物語・小説「読み」の授業のための教材研究』明治図書
 国語教育研究所編（1988）『国語教育研究大辞典』明治図書
 国語教育実践理論研究会（2011）『新提案 教材再研究』東洋館出版社
 国語教育実践理論研究会（2020）『「ことばを磨き考え合う」授業づくり』明治図書
 滝沢カレン（2020）『カレンの台所』サンクチュアリ出版
 田近洵一編（2014）『文学の教材研究』教育出版
 田近洵一（2022）『国語教育革新の視点』東洋館出版社
 田近洵一・井上尚美編（2009）『国語教育指導用語辞典 第四版』教育出版
 中央教育審議会（答申）（2016.12.21.）『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』
 中央教育審議会（答申）（2021.1.26.）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』
 辻村敬三（2019）『国語科内要論×国語科指導法』東洋館出版社
 二瓶弘行（2021）『二瓶弘行 物語の教材研究 令和完全版』明治図書
 橋本暢夫編（1993）『国語教育基本論文集成第24巻 国語教育方法論(1) 教材研究方法論』明治図書
 掘裕嗣（2016）『国語科教育授業づくり10の原理・100の言語技術』明治図書
 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版社